

教養の風景

小池 薫

天野雅郎先生からのお誘いで、今年度、後期第3クォーターに新しく開設された「わかやま未来学特講」という授業に参加することになった。この授業を通し、私は参加者の一人として、オンライン授業の新たな形、その可能性に直に触れるとともに、知と出逢うとはどういうことか、教養の育まれる場所とはいったいどんな場所なのか、といった問いについて、あらためて考えることとなった。

あるいは、教養の風景とは――。

みずからの人生の変わり目（ターニング・ポイント）に立っていると感じる時と、シラバスでは「18歳」の定義がなされている。これから大学での学びへと歩みだす1回生に向けた、「未だ来たらざる未来を祝するための授業」。1回生を対象とした特別講義だ。また、今回はそれに加えて、4学部、2～4回生をカバーする4人の学生と、大学院生、大学職員の全6人のメンバーも参加し、先生と1回生を仲介し、サポートする役割を担った。私もその中の一人である。題材となったのは、空海、岡潔、南方熊楠、香川綾、有吉佐和子、濱口梧陵、中上健次、西行といった和歌山を代表する先人たち。毎回主に一人ずつ、話題の中心としてその人物たちが置かれ、そこから議論が展開されていった。8人の先人の活動は多様であり、宗教者、数学者、生物学者・民俗学者、栄養学者、文学者、実業家・政治家と肩書を並べても、その活動の一側面を説明するに過ぎない。議論は自然と、幅広く、領域横断的なものとなった。

授業の形式は、Teamsを使用した、オンラインかつ同時的、双方向型の対話形式が選ばれた。教養科目の一つである「教養の森」ゼミナールのような、先生と学生の間での対話を中心とした形式が、オンライン上に場所を変え、展開されていたというイメージだ。これまでの授業の雰囲気が、今回も引き継がれていた。しかし、これまでとは異なる特徴もあった。それは、一言でいえば、「複数の階層の並行」である。1回生以上のメンバーの動きと、そして「チャット」というTeamsの機能の活用に、もっともわかりやすく現れていたように思う。上回の学部生、院生、職員のメンバー。その役目はまず、先生と1回生のコミュニケーションを媒介し、議論を動かしていくという役目である。議論の中で1回生に話を投げたり、1回生の発言を議論に接続したり、といった議論のサポートが、まずは上回生に期待されていた重要な動きであった。また、授業では、先生と上回生が直接議論する場面も多くあった。そこでも同様に、上回生は媒介的な役目を担

う。先生の語りに対し、上回生が応答する場面。1回生には、「上回生の反応や解釈を介して先生の言葉を理解する」という迂回路が用意されることになる。直接ではなく、中間の層を通して間接的に言葉を受け取るということ。自分自身、そこで理想的な動きができたか自信はないが、この方法そのものの可能性を確認するには、十分であったと思う。

上回生の存在のみならず、この授業では、Teamsのチャット機能もまた、議論に別の階層を用意していた。Teamsの画面は、中央に参加者の映像が映し出されるほか、その横では参加者のチャットでの発言がリアルタイムで表示されるよう設計されている。そこでは、議論と並行して、そこから派生する話題や、議論の流れの中で取りこぼされた話題が話され、また用語の補足やリンクの共有が行われた。発言するまでには形になっていない意見が、チャットで呟かれることもある。それが上回生によって拾われ、議論に組み込まれることもあった。さらに付け加えれば、上回生やチャットという層に加え、もっとも遠くに、書籍という階層もある。授業では毎回、先生によって何冊もの本が紹介された。「実際にその人の言葉を読まないといけないことがある」が、そのメタメッセージである。こうした階層間の距離は、しかし、この授業では「断絶」ではなく、むしろ次の場所へと私たちを導くステップとして、機能していたと考えたい。

31♦

計9回の補講がこの授業にはあった。7回分の正規の授業が終わる際、学生側から提案を行い、任意のメンバーと1回生とで、第4クォーターまで講義を延長することになったのだ。内容・形式については、正規の授業から引き継ぎつつ、その時々で少しずつ変更がなされた。例えば、ある回では現代書や宗教学についてパワーポイントでプレゼンを行い、それをもとに議論を行った。また、「神話」や「オタク」等、議論の流れの中で出てきたテーマを扱った回があり、「正月」や「就活」といった時季に即したトピックから話題を広げた回もある。いずれにせよ、参加者の間での即興的な対話を中心に展開し、幅広い領域に話が及ぶという点は、正規の授業と補講、双方にまたがるこの講義の特徴といえる。

補講の最終回、序盤から中盤にかけての議論では、SNSや就活といった、今の私たちに身近な事柄が取り上げられた。個人と他者の関係、就職するということの意味、欲求と欲望、「本当にやりたいこと」とは何か、そして「大学生」になるとはどういうことか——現在の自分たちが目の前にする、そうした諸々の切実な問いに沿って、対話は進められていく。そしてそれらの問いは、授業の終盤、この対話の状況、それ自体への自己言及性を伴ったテーマへと展開する。SNSとオールドメディアの比較の話に始まり、「機械」と「道具」の対比、外国語と日本語の比較、理系的な知と文系的な知の違い、と連なっていく一連の話題。それはま

た、この授業の状況——互いに年齢や立場の異なる参加者が、文理をまたがる横断的な領域の事柄について、インターネットという新しい技術と、対話というもっとも古いコミュニケーション技術を用いて語り合うという状況——そのものと、不思議な重なりを見せる。

終盤、まず確かめられたのが、SNSやインターネットという現在の私たちを取り囲むメディアが、総じて「道具」ならぬ「機械」であるということだ。その違いを考える際、「万年筆」と「鉛筆」という比喩が用いられた。私たちは「鉛筆」を、その仕組みを熟知しつつ、自らナイフで削り、手入れをしながら使う。しかし、「万年筆」については、その仕組みをあまり理解しないまま使っており、また自らの手だけで修理することもできない。その仕組みや成り立ちを理解しながら使うことができるか、という点が「機械」と「道具」を分ける。「機械」と「道具」という区別は、言葉についてもあてはまる。先生は、外国語や翻訳語、横文字の言葉等を使う時の感覚と、和語のような馴染み深い日本語——もちろんそれは簡単に一括りにできない様々な言葉の混ざり合いのうちにあるのだが——を使う時の感覚の違いに敏感であるべきだと語る。「機械」としての言葉を使うことと、「道具」として言葉を使いこなすこと。そして、「機械」と「道具」の対比は、そのまま、理系的な知と文系的な知の対比へとゆるやかに繋がっていく。最終回らしく、話は大きく広がった。

「機械」と「道具」。その対比を考えながら、私がふと思い出していたのは、ルートウィヒ・ウィトゲンシュタインが語る言語についてのある比喩だ。彼は『哲学探究』で、「路地や広場、古い家や新しい家、様々な時代に建て増しされた家々が入り混じったひとつの全体」である「古都」を、自分たちが使う馴染み深い言葉のメタファーとする。「たくさんのよく知られた小道」がひとつの言葉から「あらゆる方向」へと通じる、そうした母語の持つ豊かな言葉の連関である。そして彼は、それが「規則的な直線道路と同じかたちの家々からなる郊外」に囲まれていると、その街の姿を描写する。その郊外の道路はエスペラント語に代表される人工言語と解釈することができる（古田徹也『言葉の魂の哲学』）が、それはまた、数学やプログラミング言語といった理系の言葉を連想させる。

ウィトゲンシュタインは「言葉がわかる」とは何かを考えた哲学者である。「言葉というものには魂があるのであって、単に意味があるだけではない」と彼はいう（『哲学的文法』）。ここで、「魂」とは、その比喩からイメージから想像されるような、言葉に付随する何か実体的なもの、あるいは一対一で対応する「意味」のようなものではない。彼によれば、それは、その言葉を別の言葉に置き換えること、あるいは類似し、関係し合う言葉の連関全体を眺めることによって、はじめて言葉の「アスペクト（表情）」として捉えられるものである。あるのは言葉の

連関、小道の交わりだけである。その小道の交わる交叉路を結び目として、言葉の連なりを広げ、街全体を見渡すこと。それにより、言葉は表情を取り結ぶ。そうした、言葉が「魂」を宿す場所のことを、ウィトゲンシュタインは「言葉の場」と呼んだ。「言葉がわかる」のは、ほかでもないその場所においてである。

さて、補講の最終回、議論は最後に、先生と学生とで物事の感じ方や捉え方が違うということ、それをどう考えるか、という問いに辿りつく。SNSやインターネットとの接し方にわかりやすく現れるように、私たち学生と先生との間には、メディアや言葉、価値観等に渡って、様々な相違がある。もちろん、それは学生同士にもいえる。互いに異なる、それがそもそも議論の前提だ。「役割がある」と先生は言う。互いに立場が違い、環境が違い、目の前にする問題も違う。そのため、言葉がわからない、言葉が伝わらないという経験も時に必然である。しかしそれでも、そうした経験を織り込んだ上で、それぞれの位置から誠実に言葉を紡ぐこと。おそらくはそれが、役割を担うということであろう。私はそれを、対話におけるもっとも基本的な倫理として受け取った。

郊外の道路と、古都の小道。それが形作る都市の姿は、言語の比喻を超えて、「わかやま未来学特講」の授業の光景とも、イメージを共有する。新しい言葉と古い言葉が、理系的な知と文系的な知が、テクノロジーと対話が、混ざり合って形作る一つの空間。それを満たす大気は、地上から上空へ、複数の知の階層をなす。そこでは言葉は、一つの豊かな風景を作り出していた。

言葉の風景を見る、それは言葉そのものではなく、その微妙な配置を見るということだ。対話を進めるのはロジックだけではない。連想や思いつきで話題が広がり、言い間違いや聴き間違い、解釈の違いで話が紆余曲折し、意見の食い違いで停滞して、偶然の言葉の符合によって着地する。そうしたズレや間違いを含めた言葉の布置、その全体像を、一つの形象のようにして捉えること。あるいは風景を見るとは、横顔を見ることでもあるだろう。自分で自分の横顔を見ることはできない。それを語る本人たちでさえ無自覚な言葉のすれ違いや、逆に意図せぬ言葉の重なり、また語る姿やその対話の状況そのもの——横顔が、しかし対話全体の中で、ときに本人にも捉えきれない何かしらのメタファーとして、意味をなす場合がある。そこから間接的にメッセージを受け取ること。言葉の風景を見るとは、だから、ときに語られた以上のことを聴くことでもある。

自分の横顔が風景の一部となり、自らの視野の外で、一つの形を取り結ぶ。ここでは、別の仕方言葉が意味をなし、届けられるかもしれない。その可能性が対話の醍醐味であり、またこの授業の面白さであったと、私はいま思う。そこでは、言葉の持つ自らにもいまだ知りえぬ豊かさが、しかし信じられるのである。